

「夜霧の第二国道」

今野 耿介

八カ月余にわたって国連の研修員として英米の警察制度を視察した後、安保条約改定騒動のさなかに帰国、同時に出国を命ぜられた内閣調査室の一員として、条約の調印から池田内閣の登場による事態の急速な鎮静化に至る経緯を、なお抜けきらぬ外国ボケのうちに漫然と眺めていた私は、昭和三十六年二月一日、突然内閣官房長官秘書官事務取扱いを命ぜられた。私は前に国家公安委員長の秘書官を務めたことがあったので、一応「秘書官」というものについての予備知識はあったものの、香川県出身でもなければ大蔵省出身でもなく、大平さんと一面識もなかった私が、この発令に戸惑わなかったといつては嘘にならう。しかし私は官房長官に、ささやかながらお手伝いができることに誇りと生き甲斐を感じて、全力投球することをひそかに誓ったのである。

大平さんご自身はその前年の七月の池田内閣誕生とともに官房長官に就任されて、すでに半年経過しておられたが、私には前任者もいなければ事務引継ぎなどもなく、しかも突然の発令であったため、予備知識皆無のぶっつけ本番ですべてに当らざるを得なかった関係上、面喰うことも少なくなかった。総理には当時すでに、政務秘書官はもとより外務、大蔵、警察出身の秘書官が配置されていたが、総理まであげる問題をすべて事前にこなす立場の官房長官には政務秘書官一人がいるだけであった。従って大平さんにとって役人出身の事務秘書官は私が第一号となったのである。大平さんは役人の話もよく聞き、役所の書類にもよく眼を通しておられたが、ときに時間がないまま、私に書類に赤線を引いて差し出すようにいわれ、私もめくら蛇に怖じずで、他省庁の書類にま

で私の判断で思い切りよく線を引いたりしたこともあった。側近におつかえした期間は僅か一年半ではあったが、私から見た大平さんは、あるときは知謀あふれるディレクターとして、あるときは慎重、細心の女房役として誠心誠意、池田内閣を支えておられたと思う。

他面、大平さんは透徹した文明史観、歴史観に裏うちされた哲学をもっておられた。これは氏が稀にみる読書家であり、かつ思索の人であつたからであるうが、その片鱗は記者会見でもときに見られ、また『春風秋雨』等数冊の上梓された著書にも深い含蓄とともに湛えられている。さらに、大平さんは「鈍牛」などという世間の皮相な観察とはうらはらに、デリケートな感情、シャイな性格の持主であるとともに人の心をうつ名文章家でもあつた。前述のご著書のなかの先輩、知人、友人に対する甲文などのどれ一つをみてもそれがうかがわれるであらう。ご長男を追悼された「長男正樹の思い出」の末尾に見られる「正樹との別離。それは私が夢だに考えなかつたことである。中略 重い鉛のような悲愁が、鋭利な刃物のような力で今なお私の胸を刺し続けている。時日の経過によつても、その力は一向に衰えをみせない」のくだりなどは、惻々として読む者の胸をうつものがある。私は役人生活の最後をたまたま高松で過ごし、そこでも大平さんとの数回の出会いがあつた。そして私は白砂青松のご郷里を自分の眼で確かめ、氏を育んだ香川の風物にそこはかとない親近感を覚えたのである。

昨年七月九日、武道館の公葬の末席をけがしていた私の脳裏を、秘書官時代の断片的な追憶や東京サミットを始めご発病直前の華々しい首脳外交の軌跡が、香川の青い海などとともに去来し、さらに参列したおびただしい内外の貴顕を目のあたりにして、深い悲しみのなかにも、「大平さんもつて瞑すべし」と感じたのである。武道館を出て灰色の雨雲に覆われた空を仰いだ私の耳に、大平さんが車の中でときに口ずさんでおられた「夜霧の第一国道」が心なしに聞えてくるように思われた。

(年金福祉事業団監事)